

令和元年度

事業所名： グループホーム 敬寿荘(ひまわりユニット)

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0372200329		
法人名	医療法人社団 帰厚堂		
事業所名	グループホーム 敬寿荘(ひまわりユニット)		
所在地	〒020-3614 岩手県紫波郡矢巾町大字又兵衛新田5地割335番地		
自己評価作成日	令和元年10月3日	評価結果市町村受理日	令和元年12月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ケアセンター南昌5Fに移転し7年目になるが、建物がある新田地区の地域の方々との交流はもちろん、移転前の矢巾1区の方々との交流も継続している。地域密着型サービスとしての関わりは、地域の方々にご理解とご協力をいただき、徐々に浸透してきており、地区の行事に呼ばれたりボランティアの方々に来荘したりと様々な交流が続いている。恒例となった敬寿荘主催の夕涼み会には利用者、ご家族、地域の方々、センター職員等多数の方々に参加いただき交流を深めている。又、ケアセンター内の診療所、訪問看護とは医療連携が密に取れているほか、多職種からのアドバイスをいただくことも多く他事業所との連携も取れている。昨年より法人内のグループホーム・老健との連携を図るため、ワーキング部会を立ち上げ情報共有に努めている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kajokensaku.mhw.go.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_022_kan:true&JiyosyoCd=0372200329-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、ケアセンター南昌の5階にあり、センター内の診療所・訪問看護・地域包括支援センター等との医療・高齢者福祉等の連携体制が図られ、また、2階にある保育所の園児との交流は、利用者の楽しみの一つとなっている。事業所は、同センターに7年前に移転し、事業所の運営や活動に現在の地区の方々から熱い支援を受けながら、移転前の地区にある関係機関や住民との交流も継続している。地域に守られ、期待されている事業所である。職員会議は全員参加を原則とし、それぞれのユニットの会議の際には、他のユニットの職員が見守りに入り、管理者、リーダー、職員だけでなく、もう一つのユニットのリーダーも参加し、そこで提案された意見を下に業務の改善が進められている。管理者及び職員は、常にコミュニケーションを図り、理念「笑穂学地」の実践に努力している。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和元年10月28日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

令和元年度

事業所名：グループホーム 敬寿荘(ひまわりユニット)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホーム独自に理念を掲げ、職員それぞれ共有して実践に繋げ、グループホームのあり方を理解するよう努めている。	「愛と誠の精神」とする法人理念に沿って職員と話し合い、事業所の理念を、「愛をもって笑福学地(しょうおんがくち)」と定め、この理念を意識しながら日々の業務を進めている。「笑」は、職員同士の笑顔も大事であることを意味している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	誕生会や行事を地域の方々の協力を得て行っている。また、外部のイベント(地域のお祭り、文化祭等)にも参加し、交流している。	地区の自治会に加入し、地域の行事に参加している(副会長が運営推進会議の委員)。事業所の納涼会や誕生会、敬老会等に、地域の方々の参加、協力を得ている。移転する前の自治会とも交流を続けており、毎年文化祭には、利用者と一緒に制作した貼り絵を出品し見学に出かけている。同じ建物の2階の保育園とは開設当初から交流している。利用者はお菓子を準備し、ハロウィンでの園児の来訪(10月31日)を楽しみにしていた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	矢巾町より委託された認知症ネットワーク連絡会へは毎回出席しており、矢巾町キャラバンメイトに所属もし、地域の方へ行う認知症サポーター養成講座にも参加している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	隔月に開催し、家族様にも交代で2名ずつ出席をお願いしている。行事や職員の研修参加なども報告し、意見交換では委員や家族様からの声も聞き、サービス向上に活かしている。	運営推進会議は、2か月に1回の割合で開催し、元民生委員や現民生委員など、地域のリーダー的立場の方々を委員に依頼している。委員は、家族会、避難訓練、納涼会等にも参加し、利用者と一緒に食事を摂りながら利用者を理解し、地域との架け橋の役割を果たしている。会議の議事録は、欠席委員、家族に郵送している。	会議に対する職員の理解を深め、さらに利用者の意見をも反映するために、両者の計画的会議出席とともに、地域の社会資源である消防、警察、保育園等の関係者の参加について、併せて検討されることを期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の議事録・利用状況一覧を提出・報告し空き状況等の連絡も取り合っている。	運営推進会議に、町健康長寿課が委員として参加し、事業所運営状況の理解を頂いている。介護保険に係る手続き等についても、窓口に出向き直接指導や助言を頂いている。地域包括支援センター主催の連絡会に出席し、関係機関との連携を図っている。	

【評価機関：特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は玄関の施錠せず、居室の施錠は常時行わず見守りを行っており、ホーム内での勉強会で周知している。	ケアセンター全体で、身体行動制限廃止委員会を設置し、管理者が出席している。事業所としても、体制や仕組みを整え、身体拘束適正化に取り組んでいる。ケアセンター5階の事業所玄関は、日中は施錠していない。無断でエレベーターで出かけた利用者には、そっと見守りしながら一緒に外出していたが、現在は無断外出の心配は無い。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされないよう注意を払い、防止に努めている	権利擁護研修へ毎年参加し、研修での自施設実習や勉強会を行い職員が虐待について知識を高め疑問点など意見を出し合い、ケアの確認・向上に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ホーム内での勉強会・外部研修受講者からの伝達等も実施し理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時、重要事項説明書・契約書を説明し同意を得ている。改定等の際は十分に説明し、その都度同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議の場・又は家族アンケート・家族来荘時に声を掛け意見要望を表せる機会を設け、出された声は職員間で共有している。	家族アンケート(年1回)や年2回の家族会を開催し、家族の意見や希望を知る機会としている。7、8割の家族が参加する家族会では、利用者と家族と一緒に調理・食事をし、他の家族とも交流している。家族は「歩行機会を多く」と希望され、徒歩でいけるスーパーでの買い物や事業所周辺の散歩、外出できない場合は、屋上に洗濯物を干す作業やプランターの手入れなどを散歩がてら行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の会議で意見・提案を積極的に出してもらい、意見交換を密に行っている。日常でも常に、管理者・ユニットリーダーへ話せる環境を整え業務に反映できるようにしている。	ユニット毎の毎月のカンファレンスには、管理者と両ユニットのリーダーと、シフト外を含め当ユニット全職員参加を原則としており、その間は、他のユニット職員が応援に入っている。職員の提案で、食材を発注方式から買出しへ変更することで、経費の節減を図ること、申し送りノートやケース記録の様式の見直しにより、情報共有の確実性を図ることなど、取り組みを実施し、事業所運営の改善に貢献している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	日々の努力や実績は把握されており、就業規則も整備されている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	センター内職員研修への参加と外部研修への参加の機会も多々あり、働きながら知識を深めることができている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	センター内、他事業所との委員会での交流もあり、意見交換する場が設けられている。又、合同で行事を行う機会もあり交流ができている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に生活暦等を共有してから触れ合うようにし、本人が安心・安全に思えるような声掛け・傾聴を行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に本人の症状・困っていることを聞き取り、希望、要望を入居後もその都度確認している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前に本人の症状・困っていることを聞き取り、支援の方法を見極めるよう努めている。また、他施設の紹介、アドバイス等も行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者の方を介護される人、手伝いをする人という概念ではなく、グループホームの主役であるということ意識し助け合いながら関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との連絡を密に行い、面会の回数が少ない家族には連絡を取る等してお互いの信頼関係を築くよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外部の行事等への参加から、馴染みのある人との会話大事にするとともに、行事であるドライブや買い物機会に懐かしい場所を忘れないよう配慮している。	面会に来ていた知人や友人も、加齢に伴い少なくなっている。同センターのショートステイを利用している知人を職員が面会に連れてきてくれることもある。ほとんどの家族は、毎月事業所を訪れている。外出時、自宅の前を通るとき、自分の家と分かる利用者は限られてきた。地区の文化祭や食料の買出しは思いがけない知人との再会の機会になっている。車椅子の利用者も参加するバスハイクやミニドライブ等での外食を楽しみにしている。職員は、外出の機会を増す努力をしている。訪問理由は、新たな馴染みの関係となっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	対話しやすい入居者、そうでない入居者を把握し、職員が仲介に入りトラブルが起きないよう心がけている。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要に応じ、相談を受け付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	思いを傾聴し、思いに応えるよう努力をしている。日常の行動・言動・表情からも汲み取るよう見守りを行い、困難な場合は家族様にも協力を得て行っている。	元気が無く落ち込んでいるように見えるときは、居室に戻りじっくり話を聴いている。物盗られ妄想のある利用者の寂しい気持ちを感じたり、本音を聴くことができている。利用者の何気ない会話やたまたま目に入った景色から、買い物に行きたいや週刊誌を見たいなどの話が出た場合には、すぐ買い物に連れて行くと、満足感の溢れる表情をしてくれる。今後も利用者の思いに可能な限り応えることとしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	傾聴から普段は何をしていたか聞き取り、取り組むよう努めている。家族様からも聞き取りを行い、好きな事、趣味を把握するようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その時々によって体調・調子に変化するのを見逃さず、できることはやっていただくようにし、心身機能の低下を防ぐよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人がより良く暮らすためには、本人の意向が大切だということを把握しながら、カンファレンスでの話し合い、家族との会話で介護計画を作成している。	月1回のユニット毎のカンファレンスで、3、4名をモニタリングしている。管理者と複数の認知症介護実践者研修受講者が話し合っって計画原案を作成し、利用者、家族の同意を得て計画を決定している。計画は、3か月毎に見直しをしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の様子を個別に記録している。特記事項等がある場合は、申し送りノートを活用したり、カンファレンスで話し合い、介護計画に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	生じたニーズに対しては、可能な限り本人の意向に沿えるよう努力し、場合によっては他職種の人にも相談し柔軟な支援を行えるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	日々地域資源を活用し、入居者が安心・安全・楽しいと思えるよう努めている。また荘内へ招き交流を維持できるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	個々の希望するかかりつけ医を受診している。受診の際はできるだけ家族様にも同行の協力をお願いしている。	利用者は、入居時にかかりつけ医の紹介状を持参し、ケアセンター1階にある協力病院に転医している。専門医受診は、家族の付添いを原則としているが、都合が悪い場合は職員が同行している。精神科の場合は、家族と病院で待ち合わせし受診している。歯科は、訪問歯科診療を利用している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常での変化はかかりつけの病院看護師へ相談し指示を受けている。また受診するまでいかない事例に対しても訪問看護師への報告をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	主治医・相談員との連絡を図り、現在の状況・治療状況を聞き取り情報交換に努めている。また、訪問看護とも情報交換し、連携をとっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に、重度化した場合の終末期の支援の仕方を家族様へ確認している。また、長期入院された入居者の家族様には今一度確認するように連絡を取っている。	重度化や終末期の対応について、指針、マニュアルを整備している。入居時に、指針に沿って家族に説明し、その段階になった場合に再度協議している。昨年、対象の利用者がおり、看取りの体制を整えたが、家族の希望で医療機関へ搬送している。看取りの経験は無いが、突然死の対応を経験している。ケアセンター内には、24時間体制の訪問看護などが整備されており、重症化した際の速やかな対応が可能である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時・事故発生時の勉強会を行うとともに、センター内でのマニュアルを目の届くところへ貼って備え、協力してくれる他事業所も把握している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	センター全体での合同避難訓練や防火管理者の資格取得や災害派遣研修を受けている。	ケアセンターは、事業所を含め120人以上が暮らす施設として、合同で避難訓練を実施している。事業所では、火災、自然災害等のマニュアルの見直しをしている。毎日火気関係の自主点検を行なっている。緊急時には、近隣居住の職員、その外縁の職員の順で招集することとしており、非常招集訓練も実施している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者様の尊厳・自尊心を傷つけないよう言葉や対応の仕方を選び努めている。	利用者は言葉には出さないが職員の行動をよく見て聞いていることを意識し、職員はフレンドリーな会話であっても馴れ合いにならず、プライドを傷つけない言葉掛けに努めている。利用者は、花鉢への水遣り、茶わん洗い・拭き、テーブル拭きなど、夫々に任せられた役割を継続して果たせるよう支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人が選択できる声掛けを行い、思いを表出できるよう傾聴に努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者様個々のペースに合わせて本人の希望に沿うよう柔軟に対応している。 (入浴日・食事内容・食事場所・外出等)		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の意向に沿って支援している。散髪等もその人のタイミングで行うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	嗜好調査を行い聞き取りしている。調理・味付け・盛り付け・食卓の準備等も一緒に行っている。食後の片付けも同様に行っている。	献立は法人の管理栄養士が作成し、両ユニット同じであるが、利用者の状況により、それぞれ柔軟に変更し、買出しも翌日分だけとしている。義歯が合わず刻み食にしたり、パンでむせる利用者には牛乳に浸したりして提供している。各ユニット1人ずつの利用者が食事介助をうけている。調理中につまみ食いする利用者もおり、賑やかな食卓となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士の献立に沿い、調理している。個々が希望する適量で提供し、食事摂取量・水分摂取量は記録して残るようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人でできる方にはアドバイスをを行い、介助が必要な方には支援を行い、毎週3回は義歯消毒を行い、状況や希望によって歯科受診も行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、個々のタイミングで声掛けを行っている。夜間の失禁も防ぐために定期的に声掛けしている。	両ユニット併せて布パンツで自立7名、9名がリハビリパンツ、尿取りパットを使用し、2名はテープ型おむつとなっている。ポータブルトイレは夜間1名が使用している。排泄チェック表を活用し、夜間を含め個々のタイミングでトイレに誘導し、現状の維持、改善を図っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	バランスのいい献立を提供し、ヤクルト・牛乳・ヨーグルト等も使用し調整している。また午前・午後体を動かすよう体操も促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は隔日となっているが、本人の急な希望にも沿い行っている。	お風呂は毎日準備し、朝の失禁が多いため午前中の入浴とし、利用者は1日おきに入浴できている。毎日入りたいと希望する利用者にも対応している。朝入浴しても「夜、今日風呂無いの」と聞く利用者には、入って良いよと勧めると、それで欲求が満たされたのか「いいから」と返事が返ってくる。日々利用者の意向に沿った対応を第一に心掛けている。現在、異性介助を嫌う方はいない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の体力や希望に合わせ、休息を取り、夜間に入眠できるよう日中には活動してもらう等の工夫をしている。また本人の馴染みの寝具を使用し、安心して休めるよう環境に配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情報をファイルにまとめ、目的・副作用を全職員が確認できるようにしている。また不明な点は医師・薬剤師へ確認を取っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事仕事、外出が好きな入居者様等それぞれに張り合いを持ってもらえるよう、個々に合わせて対応している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候を見ながら外出や買い物へ車、または、歩いて行っている。家族の協力も得て、馴染みの場所への外出も行えている。	年2回、春と秋に全員で、小岩井農場や八幡平方面にドライブしている。ユニット毎には、随時花見や産直めぐりに出かけている。事業所がビルの5階にあり、単独事業所のように、玄関からすぐ外には行き難いことから、屋上を活用して、花や野菜のプランターへの水遣りや草取り、洗濯物を干すなど、事業所ならではの対応を工夫しながら、出来るだけ、散歩や外出の機会を増やすよう努めている。家族の協力を得て外泊や外出する利用者もいる。	天候や利用者の体調を見ながら、外気浴や散歩等大地に触れる機会を多くされるよう、今後も工夫をされ、仕組みとして作ることを期待します。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の希望や必要に応じて預かり金から購入している。また、ご自分でお金を所持し、自由に使えるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族への電話を希望される方がいるので家族様にその都度電話をかけるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食卓やソファの位置を工夫し、入居者同士が話やすく、広々とした落ち着いた空間作りに努めている。季節感を大切に飾りや花なども変えている。(屋上ではプランターに花を植え、日々水やりのため外に出て、季節を感じれるよう取り組んだ。)	両ユニットは、5階にあり、エレベーターを挟んで、独立する形で、南北に配置されている。どちらもオープンキッチンで、居間・食堂をL字の交点に置き、双方向に居室がある。窓から遠くに岩手山、近くに新幹線の軌道が、眺められる。ユニット毎に、利用者の要望や人間関係に配慮し、ソファや食卓の位置を工夫している。エアコンや加湿器で空調をコントロールし、窓から差し込む陽光とともに、快適な生活環境となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	それぞれが自分の選んだ場所で過ごすようになっており、仲の良い入居者同士では二人用のソファに座って会話されていたり、一人で過ごしたい方は一人用ソファ等使用されている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	慣れ親しんだ家具、又は写真・置物など家族様に相談し持ち込んでいただいている。本人の希望があればその都度家族様へ連絡も入れている。	電動ベッド、洗面台、床頭台、整理タンス、椅子が備え付けてある。ナースコールや読書灯は医療機関同様の設備である。寝具は各自準備し、シーツ等は事業所で用意している。壁面のコルクボードには家族の写真などを飾っている。居室は、○番地という名称で表記しており、内鍵が掛けられる仕様になっている。扉のガラスの飾りは、利用者のプライバシーを損なわない範囲で、安全・安心を担っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ・廊下・浴室には手すりを設置し安全に努めている。また掃除用具を入れる部屋を把握している入居者もあり、一緒に掃除してくれたりしている。食器も同様に入居者が片付けをされている。		